

地震ナマズ（五）

武者金吉

五 今村明恒先生 あきつね 素描

今村明恒先生あきつねが亡なくなられてから、かれこれ九年になる。なるうことなら、学者としてまた人間としての先生の全貌ぜんぼうを後世に伝えたいと思うが、それは筆者にはとうていできない相談である。誰かやってくれる人はいないかと物色しても、中村清二先生せいじを除いては適任者が見あたらぬ。といって中村先生はすでに八十何歳、筆をおとりになるのがおっくうかもしれない。そこでせめて

自分の知っていることだけでも、関係者にあまり迷惑をおよぼさない範囲で、書きとめておきたいと思い立ったのである。これだけのことでも今のうちに書き残しておかなければ、すべてが跡形あとかたもなく消えてしまう。それは筆者にとってしのびがたいことである。

先生の先祖、今村英生ひでしげは長崎の大通詞だいつうじで、当時、オランダ語にかけては通詞の中で英生の右に出るものがなかったという。ローマ法王から日本に派遣された宣教師シドッチを、宝永六年（一七〇九）新井白石が取り調べるにあたって、まずオランダ人についてラテン語を学び、その知識によって立派に通訳の大任をはたした功労者はこの人であった。

昭和十四年（一九三九）の夏、先生は日々帝国学士院にかよい、

『出島蘭館日誌』^{ひげしつ} について英生の事績を調べた。『出島蘭館日誌』

は長崎出島にあったオランダ商館の記録で、寛永十八年（一六四二）にはじまり幕末で終わる非常に大部のものである。原本はハーグのオランダ文書館にあるが、その複製が日本学士院に保管されているのである。いうまでもなくこの日誌はオランダ語で書いてある。先生は『和蘭語四週間』によってオランダ語を独習してこの記録を読んだ。そして英生に関する数十項の重要記事を写しとったのである。その結果、今村英生が白石のために通訳を勤めたばかりでなく、博物学、とくに薬物学に関する知識も豊かで、オランダの書物を翻訳した最初の人であったことも明らかになった。

先祖の英生と末孫^{ひでしげ まっそん}の先生とが申し合わせたように新たに一つの



理学博士 今村明恒
(1870~1948)

国語を修得して、ともにそれを使って重要な業績を残したということは、思えば不思議な因縁である。

先生は明治八年（一八七五）満五歳で小学校に入学した。その学校の教務主任、三原佐吉という人が先生の家を訪ねて、この子は将来かならず家を興し、おこお国の役に立つに相違ない、大事に育てなさいといったそうである。

先生の叔父おじに大河平某おこうびらという人があった。この人はひとかどの人物で地方官をしていたが、明治九年（一八七六）突然職をなげうって郷里に帰った。思うに、鹿児島鹿児島の形勢いよいよ切迫したためであつたらう（この人は翌年、西郷の拳兵に参加して戦死をとげた）。

この叔父があるとき先生の母堂つねに向かって、常は見込みのある子だ、とくに大切になさい、と言ったそうである。「常」とは「常次郎」のことで、先生の幼名である。

三原先生や大河平叔父が先生の将来に望みをかけたことから想像すると、幼年時代の先生はいわゆる神童ではなかったが、どこかよい意味で、他の子どもと違ふところがあつたのであろう。

先生がある日、大河平叔父の家へ行くと、叔母が「フズキ」を

一つ取ってくれという。「フズキ」は「ホオズキ」の方言である。先生は「フズキ」なんてものはありませんといっ、か、な、聞、か、ない。

「そこにあるではないか」「あれはフズキではありません。ホオズキです」「どうだっていいではないか」「いけません、ホオズキを取ってくれといわないうちは取りません」。先生は、とうとう強情リキョウを張りとおしたということである。陰かげでこの押し問答を聞いていた叔父がおもしろがって、一冊の本をくれたそうである。

相手の欠点をすこしも仮借かしゃくしない先生の峻厳しゅんげんな性格は、生涯を通じて変わらなかった。このような性格の人はともすると敵をつくる。この性格は、先生にとって得にはならなかったようである。

明治十年（一八七七）西南戦争当時、先生は七歳の少年であった。官軍が郷里鹿兒島にせまり砲声がしだいに近づくので、先生一家

は厳父一人を残して、宇宿うすきにあった厳父の乳母のもとへ避難した。ひとり家を守っていた厳父は、ある日、白刃しらいはをさげた官兵に襲われ、危いところをかううじて免れたということである。

官軍の撤退とともに鹿児島に戻ったが、薩軍が続々敗退してくるので、ふたたび宇宿に難を避けることになった。しかし、この地も安全といわれなかった。ある日、母堂が先生の弟をつれて川の畔ほとりにたたずんでいると、突然、銃弾が雨あられと飛来するので、あわてて谷間に身をひそめたということである。

西南戦争の結果、厳父は職を失い、先生は真正コレラにかかって九死に一生を得るなど、この年は不祥事の連続であった。

厳父は後になって鹿児島とっがい等外二等出仕に任ぜられた。

先生の幼年時代には今村家はそうとう裕福で、下女下男も使い

何不自由なく暮らしていたそうである。それが、厳父の過失によってたちまち貧乏のどん底に落ち込むことになった。厳父がある人に、有価証券七〇〇円全部を詐取さしゆされたのである。この証券は、たぶん士族に与えられた金禄公債きんろくであろう。

生活はたちまち窮迫きつぱくを告げ、教科書代にもことを欠く状態におちいった。明治十四年（一八八一）先生、十一歳のときのことである。

明治十六年（一八八三）に先生は首尾よく鹿児島中学に入学したが、その翌年には厳父が依頼免官になった。家の暮らしはますます苦しく、家具・庭木まで売りつくした。当時、神戸で巡査をしていた長兄くから月々二、三円の仕送りはあったが、わずか二十銭の古靴くつを求めることさえ容易ではなかったそうである。

豆腐のごときも食べるのは厳父だけで、他のものは一年に数回、それも一片か半片を与えられるのみであった。副食物は明けても暮れても卵の花の味噌汁ばかりだったという。当時、先生の最大の願望は、早く立身出世して三食とも豆腐を食べられるような身分になりたいということであったそうである。先生が、戦争のため食糧が欠乏するまで毎朝、豆腐とワカメの味噌汁を欠かさなかったのは、この少年期におけるはかない望みに由来していたのかもしれない。

明治十八年（一八八五）に厳父が准判任御用掛を拝命して、月俸金七円を支給されることになったときには、家計いよいよ窮迫、赤貧洗うがごとき時であったから、家族一同狂喜したということである。

鹿児島中学は県立中学造士館となり、ふたたび変わって高等中学造士館となった。旧制高等学校に昇格したのである。

先生は学力試験に及第して入学の資格は与えられたが、困ったのは従来のように官費ではなくなったことであった。厳父には学資を負担する資力がない。先生はやむをえず、二人の兄君に手紙を書いて援助を乞うた。

次兄の手紙は冷たかった。大言壮語をやめて適當の職につけと
いうのである。それに反して長兄しよいちわんの返事には、自分はあまんじて
犠牲になるから初しよいちわん一念をつらぬけと励はげましてくれたうえに、金六
円かわせの為替が封入してあった。当時、長兄の月給は金八円にすぎな
かったのである。

先生は造士館入学をとりやめ、上京して一高に入った。一高時

地震ナマズ (五)

*次週予告

第六巻 第一五号

地震ナマズ (六) 付録地図 武者金吉

第六巻 第一五号は、

二〇一三年一月二日(土) 発行予定です。

定価：100円(税込)

PDFマガジン 週刊ミルクティー*第六巻 第一四号
地震ナマズ (五) 武者金吉

発行：二〇一三年一月二六日(土)

編集：しだひろし / PoorBook G3199

<http://www33.atwiki.jp/asterisk99/>

出版：*99 出版

〒994-0024 山形県天童市鎌田二丁目

アパートメント山口A-11011

販売：DL-MARKET

◇巻末イラスト：石川千代松。